

日本英学史学会中国・四国支部

ニューズレター

No.88

Historical Society of English Studies in Japan, Chugoku-Shikoku Chapter

ご挨拶

田村道美

会員の皆様、明けましておめでとうございます。皆様のご健康とご多幸を心よりお祈り申し上げます。

皆様のご協力のお陰で、昨年も2回の研究例会を開催し、『英學史論叢』第19号も発行することができました。なお、本年5月発行予定の『英學史論叢』は第20号と記念の号となります。奮ってご投稿くださいますようお願いいたします。

さて、昨年11月に日本英学史学会第53回全国大会が松山大学で開催され、竹中龍範先生が「松山時代の漱石」の演題で特別講演を行いました。先生のご講演は貴重な資料を駆使した非常に綿密なものでした。また、先生はご講演の冒頭で、村田由美氏の新発見—漱石が愛媛県尋常中学校の校友誌『保恵会雑誌』に「アーサー、ヘルプスの論文」という文章を寄稿し、Helpsの*Essays Written in the Intervals of Business*中の‘Secrecy’を翻訳していること—を紹介されましたが、筆者はこれに興味を抱きました。

筆者の研究対象の一つであるCassell's National Libraryは1896年から1900年の間に209作品を刊行して終刊となりましたが、翌年から新シリーズと銘打って、209作品の半数と新作品を加えて刊行を開始しました。新作品は*The Haunted Man* (by C. Dickens), *Heroes and Hero-Worship* (by T. Carlyle), *Friends in Council* (by A. Helps), *The Life of Nelson* (by R. Southey), *Selected Poems from Wordsworth*の5点でした。DickensやCarlyleと並んで、現在では全く忘れ去られたHelpsの作品が選ばれたことに奇異な感じを覚えますが、当時は大変高く評価されていたためと思われます。漱石が英国留学でロンドンに滞在していた時期は1900年10月から1902年12月まででした。漱石がHelpsの名文家としての評判を耳にして*Essays*を購入したことは十分に考えられることです。また、漱石が*Essays*に収められている15篇の文章の中から‘Secrecy’を選んだと知って、すぐに『心』が思い浮かびました。村田由美氏も『漱石全集』未収録「アーサー・ヘルプスの論文」について、の末尾で、「漱石が『心』で先生が「秘密」を打ち明けるという構想を練ったとき、このヘルプスの論文が念頭にあったのではないか。」と推測しています。しかし、筆者はその逆ではなかったかと思っております。つまり、「先生の秘密」に類する秘密を漱石は若い頃から持っており、そのためHelpsの‘Secrecy’を読んで共鳴し、訳出したのではなかったかということです。現在、この辺のことを論文にまとめられないかと考えているところです。

最後になりましたが、皆様の益々のご活躍を祈念するとともに、本支部への一層のご支援をお願い申し上げます。

(日本英学史学会中国・四国支部支部長)

<エッセイ>

「回天」の偉業を達成して150年

上 杉 進

2018年は長州藩が「回天」の偉業を達成してから150年、節目の年である。知事レベルでは薩長土肥同盟を結び、経済、産業面で交流を図るという。吉祥である。筆者は無謀な試みであるかもしれないが、その偉業を達成した立役者たちを寸描しておきたい。

毛利敬親(1819-1871)は18歳で第13代藩主となり、村田清風(1783-1855)を家老に抜擢。清風は侍医坪井信道の推挙により、医家、蘭学者の大島郡出身青木周弼を召し抱え、重用した。このトリオは秀逸で、回天の偉業へ向けての礎を盤石なものにした。

清風は新田・四白(米、塩、蠟、紙)等の開発を行い、財政立て直しに成功した。周弼は蘭学、医学の力量は抜群、また広い人脈(緒方洪庵とは入魂の仲)を活用し、海外情報を収集。西洋学所の開設、洋学習得の奨励(1854)等を建言した。敬親公が西洋事情に通じ、開明的であったのは良き建言者周弼が脈をとりながら、西洋事情を親しく報告していたからであろう。

萩の呉服町に維新三傑の一人木戸孝允の旧邸がある。その三軒隣に石碑があり、青木周弼(1803-1863)、弟の研蔵(1815-1870)、養子周蔵(1844-1914)の名が刻してある。研蔵も蘭学の達人で兄を助け医療行政で腕を振るい、藩主元徳、さらに明治天皇の侍医をも務める。周蔵は独語の達人で山県、松方の外相を務める。この3人の長州への貢献は特筆すべきである。

1853年、ペリーが浦賀に来航。長州藩は清風の蓄財で軍備肅然として大森に出兵。幕府の信頼が厚くなり周辺の海防を任せられ、長州藩は雄藩への一步を踏み出す。

同年、宇和島藩主伊達宗城(1818-1892)は洋式軍備の充実のため村田蔵六(1825-1869)を招聘。蔵六は幕府にも出仕(蕃書調所、講武所)し、幕府の内部事情に通じ、兵学者としての経験を積む。1859年長州藩邸での「蘭書会読会」で蔵六(適塾四代塾頭)は実力を遺憾なく発揮。長州藩は宇和島藩に懇望し、青木周弼の「育」として召し抱える。蔵六は藩命で大村益次郎と改名し、回天偉業の仕上げの一步を踏み出した。奇兵隊の創設は高杉晋作であったが、実際には大村が、志さえ持っていれば鉄砲を担がせ、農民を戦争プロの幕兵に勝てるまでに鍛え上げた。民衆ナショナリズムをエネルギーに強大な力を持つ集団を生み出したのである。見事!

恩師緒方洪庵(1810-1863)の「上医は国の病を治す」との言葉から、帰藩後西洋兵術の翻訳・研究に没頭。戦略の根幹は「最新式の銃・大砲の性能を最大限に活用する」である。1866年の薩長同盟により、薩摩を通じてT.B.Gloverから命中精度が高く、射程距離の長い(約3キロ)銃砲を手に入れ、ナポレオン戦争以来、火力中心の三兵戦術(歩兵・騎兵・砲兵を統合して指揮する)を駆使。禁門の変で長州は賊軍となったが、朝廷の赦しで官軍となり立場が逆転。討幕に拍車がかかる。大村は上野戦争では、3,000名の彰義隊を包囲し、逃げ道を作って無駄死にさせなかった。大村の徹底した合理性が刀で禄を食んできた武士の存在感を失わせた。その恨みの一刀が偉傑大村の命を奪った。体の一部は敬慕する洪庵の墓(龍海寺)のそばに希望通り埋められた。名君敬親公が藩主の間まさに波乱万丈、しかし関ヶ原以来の宿願を果たし欣快であったろう。

(日本英学史学会中国・四国支部副支部長)

平成28年度第2回(通算75回)研究例会報告



2016年12月10日(土)、ノートルダム清心学園 清心中学校・清心女子高等学校(岡山県倉敷市)において、本年度第2回(通算第75回)研究例会が開催されました。素晴らしい会場をご提供くださった清心中学校・清心女子高等学校長 三宅聖子先生をはじめとする学校関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

例会のご準備から当日のご発表まで、山田昌宏先生には格別のご配慮を賜りました。篤くお礼申し上げます。続けてご発表くださった能登原昭夫先生、河村和也先生と研究グループの皆様、そして当日遠路ご参集くださいました皆様方に感謝申し上げます。ありがとうございました。

日 時： 2016年12月10日(土) 13:00 受付開始

会 場： ノートルダム清心学園 清心中学校・清心女子高等学校 記念館2階会議室
〒701-0195 岡山県倉敷市二子1200

開会行事(13:30~13:40) 支部長挨拶 田村道美(香川大学)
会場校挨拶 三宅聖子(清心中学校・清心女子高等学校長)

研究発表①(13:40~15:20)

「岡山県の中学校・高等学校における英語教育に関わった人たち」 山田 昌宏(本学会会員)
「山田昌宏先生のご発表を受けて」 能登原 昭夫(元山陽学園大学)
司会 竹中 龍範(香川大学)

研究発表②(15:40~16:40)

「明治末期小学校英語読本のリーダビリティ分析(その1): *The Mombusho English Readers for Elementary Schools* を中心として」 河村和也(東京電機大学) 松岡博信(安田女子大学)
馬本 勉(県立広島大学) 小篠敏明(広島大学名誉教授)
司会 堂鼻 康晴(広島市立広島商業高等学校)

閉会行事(16:45~17:00) 副支部長挨拶 上杉 進(LRT代表)

忘年懇親会(18:00~ 倉敷ステーションホテル海鮮料理「白壁」

研究発表①

「岡山県の中学校・高等学校における英語教育に関わった人たち」山田 昌宏 (本学会会員)

「山田昌宏先生のご発表を受けて」 能登原 昭夫 (元山陽学園大学)

【概要】『年表』に記載されている人名は1011人で、延べ1974人である。複数回の記載者は、5回以上が66人、10回以上が27人である。

具体的には岡山大学の池上保太氏と片山嘉雄氏は岡山大学の発足以来教員養成に携わると同時に県内研究組織の設立、研究会や研修会の講師として活躍され、松畑熙一氏、高塚成信氏らがそれを受け継がれた。その他全国的に活躍された小川芳男氏、若林俊輔氏、カムカム英語の平川唯一氏らがいる。行政関係者では中原悦二氏、能登原昭夫氏、城山藤一氏、須賀 明氏らが指導主事として現場を牽引された。中高の先生方として中学では片岡 肇氏、草加充康氏、高校では芝田 敬氏、須賀 廣氏をはじめ、多くの方がいる。



山田 昌宏 氏

【参加者の感想】

◆御労作『岡山県中学校・高等学校英語教育史年表』を元に、登場頻度の高い人物を大学関係者、行政関係者、中学校・高等学校関係者教員の3つのグループに分類され、それぞれの人物の業績を紹介していただき大変参考になりました。今後は今回紹介された人物の関係性や影響関係などに焦点を当てて、岡山の英語教育史の「流れ」をさらに解明して下さるものと期待しております。

能登原先生の「恩師景迎」をお聴きして、人との出会いの大切さと不思議さを改めて実感いたしました。また、「点から線へ、線から面へ、面から流れへ」とのご提言も自分なりにこれからの研究に活かしていきたいと思っております。＜E. Woodhouse＞

◆山田先生のあの年表は岡山県英語教育史上に残る金字塔 敬服します。

「カムカム英語のテキスト」の中に見つけた言葉：英語をマスターせんとすれば学び手がマスターとなり、英語を奴隷とせよ 成程、納得。

能登原先生の「本・人との巡り合い、学恩のありがたさ」共感。Geopolitical ideas はものを考える視点として有効 多謝。＜東洋美人＞

◆ご労作『岡山県中学校・高等学校英語教育史年表』をご研究の最終産物に終わらせることなく、そこに収められた情報をデータベースとして戦後の岡山県英語教育史の諸相をどのように分析されるか、その第一弾として人物を取り上げていただきました。もちろん、この年表に現われないところで岡山県英語教育の発展に寄与された方々がおられるでしょうが、やはり本年表に取り上げられたところ、いわば表舞台においてなされた貢献は大きなものがあり、それ

を正に評価するうえでも本日のご発表には意義があったと考えます。この年表を基にこれからどのようなご発表が続くのかと楽しみにしております。

また、続く能登原先生のご発表にあった、この年表を点から線へ、線から面へ、そしてその面を流れへと捉えたものとする評価には、ご自身の、言うなれば生きる岡山県英語教育史の目でもって本年表を読まれたストレートな感想かと感じ入りました。＜Dragon＞

◆岡山県がいかに優れた英語教育の発達を遂げてきたかが本当に良くわかりました。大変面白いエピソードをありがとうございました。＜マッピー＞

◆山田昌宏先生が出版された『岡山県中学校・高等学校英語教育史年表』は、戦後の岡山県の中学・高等学校・行政の英語教育関係の記録が年度ごとに網羅された大変重要な資料で、山田先生が中学校教諭、指導主事、高等学校教諭と務められたから可能になった偉業であると感じました。

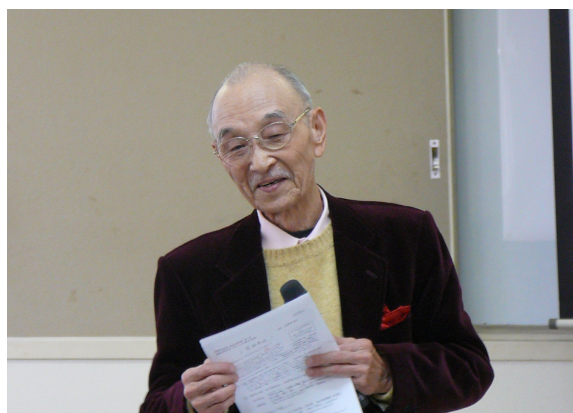
また、能登原昭夫先生は、今回初めてご発表をうかがうことができました。先生の＜恩師景迎＞はあふれ出る教養とユーモアに富むストーリーに感銘を受けました。今ギリシア語をお勉強中とのこと、次のご発表を楽しみにしています。＜安部規子＞

◆正に圧巻の研究成果物です。岡山英語教育界の宝と言えるでしょう。恐らく中学校・高校さらには教育行政の流れが一覧できる文献は初めてではないでしょうか？今後の貴重なレファレンスとなると想像します。平川唯一氏の「カムカム英語」について改めて価値付けがなされ、目から鱗でした。

能登原先生による「面から流れ」への示唆は、新鮮な驚きでした。今後の教育や研究のあるべき方向

性を示していただいた思いがしました。「師との出会い、書籍との出会いが人生をつくる」「(人生で)何人の弟子をもつか?」は大変印象的なお言葉でした。

<堂鼻康晴>



能登原 昭夫 氏

◆「これからの英学史研究は、“今”，“ここで”しか、出来ない研究をしていきなさい」と、松村先生がよくおっしゃっていました。山田昌宏先生のご研究はまさにその通りだと思います。

「点から線へ、線から、面へ・・・」そして、「流れへ」とつないでいくのがこれからの英語教育であると力説された能登原昭夫先生のお姿は「生涯現役」、

「生涯青春」、とても勇気づけられました。

山田昌宏先生のご研究をどのような「流れへ」とつないでいくのか、また、そのための「歴史研究」でありたいと思います。<Rainbow>

◆ある著作に付された年表や索引が、その書物全体の価値を高めることは疑いのないところでしょう(特に私たちの関わる学界では)。それでも年表や索引自体は、これまで副次的な扱いを受けてきたように思います。ところがこのたび上梓された山田先生の年表は、それ自体の情報量が極めて多く、年表のための「索引」が用意できるほどです。ご発表で扱われた固有名詞は、年表の中に何度も登場するほど、岡山の英語教育界にとって大切なお名前ばかりです。このように、山田先生の年表はそれ自体がテキストコーパスの役割を持ち、そこに登場する様々なキーワードの頻度からその重要度を示すことができる、新しい時代の年表なのだと感銘を覚えながらお話をうかがいました。ありがとうございました。

年表中に何度もお名前が登場する能登原先生のお話を楽しくうかがいました。年表が、英語教育のこれからをどう示してくれるか、大きなヒントを与えていただきました。ありがとうございました。

<Horse>

研究発表②

「明治末期小学校英語読本のリーダビリティ分析 (その 1) :

The Mombusho English Readers for Elementary Schools を中心として」

河 村 和 也 (東京電機大学) 松 岡 博 信 (安田女子大学)

馬 本 勉 (県立広島大学) 小 篠 敏 明 (広島大学名誉教授)

【概要】明治期～現代の英語教科書のリーダビリティ(英文難易度)を新開発の指標 (Ozasa-Fukui Year Level, Ver.3.5 nhnc1-6) を用いて比較する研究の一環として、今回は特に、文部省(1908)『小学英語読本』(1～3 巻)を詳細に分析した。このほか、明治 30～40 年代に高等小学校で用いられた宮井安吉(1900)『小学英語読本』(1～4 巻)、神田乃武(1901)『小学英語読本』(1～4 巻)、井上十吉(1902)『小学英語新読本』(1～4 巻)の基礎データを提示した。これらを通じ、当時の小学校英語教科書の難易度を現在の中学校教科書との比較によって示すことができた。今後はさらに精緻なデータ分析を行い、現代の教科書作成にどうつながっていくのか、究明していきたい。



河村 和也 氏

【参加者の感想】

◆昨年の 12 月例会で、小篠先生が ICT 技術を利用して英語教科書のリーダビリティを測定するソフトを開発しているお話をうかがいました。今回の発表では、さらに精度を高めたソフトを使用して、明治時代後半に小学校で使用された 4 種類の教科書の分

析結果の精緻なご報告をいただきました。次なる展開を楽しみにしております<E. Woodhouse>

◆指標の開発に要した緻密な研究とそのために費やした膨大な時間に頭が下がります。内容が数量化しにくい読本などの、質の分析は how? <東洋美人>

◆明治期の小学校英語教科書(読本)を新しいリーダビリティ・スケールで分析された結果のご発表でしたが、それを現在の中学校・高等学校を規準とするスケールによって算定するということは、義務教育の尋常小学校が6年制になった明治40年の前後では高等小学校に加設された英語の学習開始年齢が異なるのでパラレリズムが成立しないため、用いるべき尺度として妥当なのかという疑問を感じました。今後、この分析とあわせ、時代背景としての社会情勢を踏まえながら、題材内容の分析に踏み込んでいただくことを期待しております。＜Dragon＞

◆明治時代の高等小学校の英語教科書のリーダビリティをOzasa-Fukui Year Levelの最新バージョンで分析した結果から、これが現在の中学校の英語教科書の原形になっているのではないかとまとめられていた。今回、中学1年から高校3年までの6冊を分析できるものとなったことは大きな前進であり、また今後日本の大学生レベルの教材まで分析指標の開発が続いていくものと期待しています。

＜安部規子＞

◆明治期の教科書のreadability分析は大変興味深いものでした。当時の(高等)小学生が現行の高校レベルの英文に触れていた可能性があることは、驚きでした。高校教師である私は、ついつい「ちゃんと授業についていけていたのだろうか？」と疑問を

もってしまいました。＜堂鼻康晴＞

◆コンピューターを使用した「リーダビリティ研究」についてはよく理解できませんが、明治末期の小学校英語読本と現行教科書との比較にとっても興味を持ちました。このご研究の結果から何を「流れへ」として学ぶことができるのでしょうか。明治期の高等小学校の学習者の年齢と現行の中学校の学習者の年齢はほぼ同じです。しかし、学習者の「質」が明らかに違うので、現実には数字で表れたリーダビリティとは異なってくると思います。コンピューターは優れているけれども、最後に判断するのは私達の「コンピューター」だと思います。＜Rainbow＞



松岡 博信 氏 小篠 敏明 氏

【研究例会全体について】

◆初めてノートルダム清心中学校・清心女子高等学校を訪れましたが、とても環境がよく、生徒さんたちも皆明るくて礼儀正しく、大変気持ちよく過ごすことができました。このような素晴らしい会場を提供してくださった同校の三宅聖子校長先生、交渉に当たられた山田昌宏先生には改めて感謝申し上げます。＜E. Woodhouse＞

◆出席会員が少ないのが気になります。

会場校の女生徒二人のやさしい言動は120年にわたる「心を清く」の教えが体現されているようで、心豊かに学会に臨むことができた。感謝。

＜東洋美人＞

◆清掃の行き届いた校舎や生徒さんの心地よい応対など、日ごろのしつけがしっかりとなされていることを感じさせる会場の雰囲気に加え、夕刻にはゆったりとした座席配置の会場で皆さんと楽しいひと時を過ごすことができ、ここしばらくは週末もかなりつぶれて慌しくしておりましたので、癒しの一日となりました。このような会場をご準備いただいたうえに、ご自身も研究発表をして下さった山田先生、ありがとうございました。＜Dragon＞

◆素晴らしい会場を提供してくださった学校の皆様、山田昌宏先生に感謝申し上げます。＜マッピー＞

◆クリスマスの時期に、ノートルダム清心学園の記念館という特別な雰囲気の中での研究例会に参加することができて大変うれしく思いました。懇親会も出席させていただき、山田先生には大変お世話になりました。＜安部規子＞

◆会場は素晴らしい環境でした。正に「清心」の思いがしました。生徒によるおもてなしの雰囲気も感動しました。

研究例会に際して個人的な出席ではなく、皆がどれくらい「弟子」を引き連れて参加できるか？・・・これは、本支部の発展のためにも重要な課題ですね。

＜堂鼻康晴＞

◆とても印象深い倉敷例会となりました。中庄駅から歩いて会場へ到着したときから雰囲気の良さを感じておりましたが、校長先生のご挨拶を頂戴して、なるほどと思うことがたくさんありました。学校関係者の方々にお礼申し上げます。

山田昌宏先生には、準備段階からたびたびご連絡を頂戴し、随所に細やかなご配慮を賜りました。ほんとうにありがとうございました。＜Horse＞

英学史学会全国ニュース

>> 「日本英学史学会報」No.141

2017年1月1日発行。次の記事などが掲載されています。

巻頭言 松山全国大会に思う (塩崎 智)

《英学史散策》

- ・吉雄権之助「英吉利文話之凡例」：もうひとつの写本発見！ (石原千里)
- ・九州支部活動の40年を回顧する(3) (西 忠温)
- ・米国探訪記—札幌農学校教授 D. P. Penhallow の足跡 (赤石 恵一)
- ・東京国立博物館初代館長 町田久成の銅像 (三好 彰)

※閲覧を希望する支部会員の方は、支部事務局までご連絡ください。

※日本英学史学会（本部）の会員登録には、中国・四国支部とは別に手続きが必要です（入会金 2,000 円、年会費 7,000 円）。

中国・四国支部ニュース

>> 年会費納入のお礼とお願い

すでに多数の会員の皆様より今年度の会費（一般 3,000 円、学生 2,000 円）をご納入頂いております。ご協力に感謝申し上げます。これからお振込みの方は下記口座までよろしくお願いいたします。

ゆうちょ銀行「振替払込用紙」を用いる場合

（口座番号）01360-9-43877

（加入者名称）日本英学史学会 中国・四国支部

他の金融機関から振込む場合

（店名）一三九（伊予銀行）店（139）

（口座番号）当座 0043877

（加入者名称）日本英学史学会 中国・四国支部

>> 紀要の配付と販売について

研究紀要『英學史論叢』は、会員の方へ一部ずつ、研究論考・研究ノート執筆者には所定の部数をお渡ししています。最新号やバックナンバーをご希望の方には、一部 1,000 円（非会員 1,500 円）にて販売いたします（郵送料込）。詳細は事務局まで。

バックナンバー収載の研究論考等のタイトルは、支部ウェブサイトにてご確認ください。

<http://tom.edisc.jp/eigaku/bulletin/eigakushi-kaiho-ronso.htm>

>> 『英學史論叢』第20号記念号原稿募集

ニューズレターNo.87においてもご案内差し上げたとおり、日本英学史学会中国・四国支部研究紀要『英學史論叢』は次号で第20号となります（2017年5月発行予定）。

記念の号となりますので、ぜひ多数のご投稿をお願いいたします。

研究論考、研究ノート、英学史随想、英学史時評、書評等、会員の皆様の積極的なご投稿をお待ちしております。

・ご投稿に際しては、ニューズレターNo.87、『英學史論叢』第19号、ならびに本支部ウェブサイトに掲載の「執筆要領」および「標準書式」に従ってください。

・原稿提出の締切は、**2017年2月20日**（消印有効）です。事務局まで郵送してください。

・研究論考・研究ノートは、正副計3部をお送りください。英学史随想、書評等は1部お送りください。

>> 平成28年度第2回理事会

2016年12月10日（土）、倉敷例会に先立って開催された理事会において、今年度の活動報告および平成29年度活動計画について協議しました（出席者7名）。以下、来年度の行事予定です。

支部総会・第1回研究例会

平成29年5月27日（土）広島市内

第2回研究例会

平成29年12月9日（土）

香川大学教育学部（高松市）

このほか、新年度は役員改選となることから、運営体制の見直しについて次の点を協議しました。

- ・役員交代の申し出について
- ・支部運営に関する理事の役割について
- ・実務に当たる幹事の増員について
- ・役員について定めた会則内容の見直しについて

>> 訃報

田村真一先生（平成27年6月11日ご逝去）

平成29年度第1回(通算第76回)研究例会発表者募集

平成29年度第1回(通算76回)研究例会を、2017年5月27日(土)に広島市内で開催の予定です。研究発表(持ち時間は質疑応答を含めて60分程度*)を希望する会員は、(1)発表題目、(2)発表者氏名(所属)、(3)発表概要(200字程度)、(4)使用予定機器、以上4点について明記の上、事務局までお申込みください。

申し込み先 ・メール eigaku@tom.edisc.jp
・ファックス 0824-74-1724 (馬本研究室直通)
・郵送 〒727-0023 広島県庄原市七塚町562 県立広島大学馬本研究室

申し込み受付期間: 2017年2月20日(月)～3月21日(火)

* 申込者多数の場合は、時間調整を行う場合がありますので、ご了承ください。

英学史情報ひろば

会員業績、イベントほか

◇第196～197回「広島ラフカディオ・ハーンの会」

ニュース(2016年12月～2017年1月)

◇日本英語教育史学会 第260回研究例会

(1月7日・東京電機大学)

「<自著を語る> 武信の会った人々:

森悟著『武信由太郎伝』を素材に」

提案者: 森悟(鳥取県立米子南高等学校)

◇能登原昭夫(2016)『庶民の昭和史: 学び、思い、これからも(2016自分史プロジェクト)』晴れの国長寿文化協会。

会員の皆さまによる著書、論文、エッセイ、講演、研究発表や、英学史に関係する資料等の情報をお寄せください。どうぞよろしくお願いします。

広島英学史の周辺(54)▼倉敷例会の翌日、美観地区を散策しました。青空のもと、ここは本当に蔵の町だと感じながら、のんびりと時間を過ごしました。▼ふと見上げると、ほぼ満開の桜があります。ヒマラヤザク



ラという冬に咲く花だそうです、眺める私はすっかり春の気分。そういえば、勤務地近くにジュウガツザクラというのがあって、秋に咲いた桜に驚いたことを思い出しました。▼美観地区にはたくさんの観光客が

あり、賑わいづくりがうまくいっているなと思いました。あるラジオ番組で、日本全国にはどんどん綺麗になっていく街と、そうでない街がある、ということを書いていました。初めて訪れたので何とも言えませんが、おそらく倉敷は前者者なのではないでしょうか。対照的に、かつて賑やかだった元観光地に出かけると、なんだか寂しい思いをすることがあります。それはそれで風情があるのですが。▼綺麗な街で目につくのは、

歴史的な建造物の美しさです。写真は、大正6年に建てられた倉敷町役場ですが、現在も観光案内所

「倉敷館」として使われています。歴史的なものが今に活かされていること、これも街の美しさにつながるのかもしれませんが。▼新しい年を迎え、支部創設から40周年が近づいてきました。『英

学史会報』20号を引き継いだ『英学史論叢』も20号の節目を迎えます。記念号へのご投稿、何卒よろしくお願い申し上げます。(馬)



日本英学史学会中国・四国支部ニューズレター No.88

2017年1月31日発行

発行 日本英学史学会中国・四国支部(代表 田村 道美)

事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町562

県立広島大学 馬本研究室内

電話&FAX: 0824-74-1725 (研究室直通)

e-mail: eigaku@tom.edisc.jp

ホームページ <http://tom.edisc.jp/eigaku/>

郵便振替口座 01360-9-43877 日本英学史学会中国・四国支部

Newsletter No.88 January 31, 2017